

「協働の学び」での効果的な NIE 実践のあり方

指定校 2 年次

大町市立美麻小中学校 黒岩理恵子

(I) 本校の NIE の現状

【全校】

- 地元の新聞販売店さんより信濃毎日・朝日・読売・毎日・中日・産経を届けていただき、3～9年と特別支援学級に朝刊を配布した。
- 本校が取材された新聞記事を教務主任が掲示し、印刷して配布した。
- 各学年、行事のまとめとして新聞作成を行うことが多かった。
- 生徒会の情報委員会が主体となり、学校行事ごとの新聞を作成し掲示した。

【小学校】

- 2～6年生は新聞コンクールに応募し、各学年数名が入賞した。
- 4年生では、信濃毎日新聞の出前授業で新聞の作り方を教わり、国語で行事新聞を作成した。
- 5年生では、国語の授業で新聞について学習し、自分の興味のある記事を朝の学活で紹介し、その記事をスクラップした。また週末や長期休暇の家庭学習として、信濃毎日新聞ワークシートを解く課題を出した。
- 6年生では、国語「平和の砦を築く」の単元で新聞を活用し、意見文を書いた。(公開授業)

【中学生】

- 国語の授業の始めに、「天声人語」の3分書き取りを行っている。
- 週末の課題として、新聞スクラップをして自分の感想を書いている。
- 「総合的な学習の時間」の成果を新聞作成ソフトで新聞形式にまとめ、美麻地区の全戸に配布した。
- 夏休みの課題として「スクラップ新聞」を作成しコンクールに応募。1人奨励賞を受賞。
- 7年国語の「シカの落ち穂拾い」の単元では、信濃毎日新聞の「御嶽噴火災害から1年」の特集記事を使って図表の読み取りの発展学習を行った。(公開授業)
- 8年生では、国語の「メディアと上手に付き合うために」の単元で新聞を比較し、報道の内容が変わることを確認した。
- 9年生では、普天間移設問題の全国紙の社説と沖縄タイムスの社説の比較読みを行った。

(II) 実践のねらい

昨年度より小中一貫校としてスタートした本校では、「自律した学習者」の育成をめざして「協働の学び」に取り組んでいる。「協働の学び」とは、従来の一斉学習や講義型のスタイルではなく、少人数グループで「聴く・問う」から始まる言語活動を基盤として、課題について互恵的に語り合う学習形態のことである。各発達段階に応じた学びの特徴は以下の通りである。

発達段階		課程	重点
ホップ期	1年～4年	人間としての基礎を培う課程	体験的な学び
ステップ期	5年～7年(中1)	思考力を高める課程	ものごとの根拠を探る学び
ジャンプ期	8年～9年(中2～3)	社会との関係を明らかにする課程	自らの生活を拓く学び

今年度は、各学年、各教科の学習において新聞活用を取り入れ、「協働の学び」での効果的なNIE実践のあり方を探ろうと考えた。

(Ⅲ) 研究の概要

<実践授業その1> 6年国語 実践者：梨子田稔子教諭（5・6年生国語教科担任）

1 個人研修テーマ

思考力を高める課程のステップ期において、ものごとの根拠を探る学びとなる3つの対話（対象との対話・友との対話・自分との対話）の質を高める。

2 授業内容

(1) ○大単元名「意見を聞き合って考えを深め、意見文を書こう『未来がよりよくあるために』」（全15時間）

○小単元名「共通の資料『平和の砦を築く』をもとに意見文を書こう」（全5時間）

(2) 単元の核心

「情報を整理し、互いの意見を聞き合って自分の考えを深める。」

(3) 本時のねらい

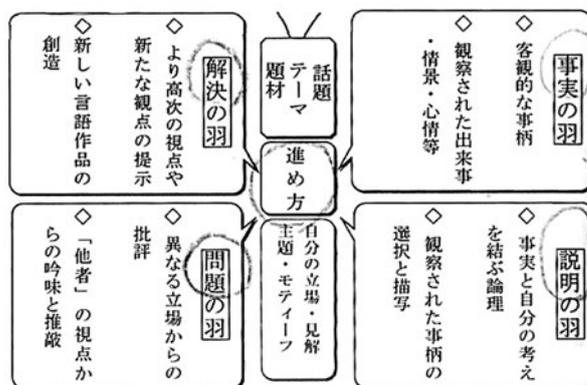
「原爆ドームを保存することについて」Bマップを使い「非」と「是」の両方の立場で、新聞資料から事実を探し、その説明を考えた子どもたちが、当時の議論をシミュレーションしてみることで、当時の人たちの気持ちを考える。

3 テーマに迫るための手だて

(1) Bマップ（バタフライ・マップ）を利用する。

- ・①「事実の羽」②「説明の羽」③「問題の羽」④「解決の羽」に自分の考えを付箋に書いて載せて、自分の思考の過程が視覚的にわかるようにし、自分の考えを整理する時に使用する。
- ・友だちのBマップを見て、友だちが何を根拠にどんなことを考えているのかが視覚的にわかり、お互いに助言をし合うことができやすくなる。

バタフライ・マップ法とは、蝶の形を模した一枚のマップを使って子どもたちの脳内に論理力を構成する思考の枠組みを焼き付ける学習法。マップには、合計で6つの部品があり、部品は論理力を育てるために欠かすことのできない項目名がつけられている。子どもたちは、蝶の姿を思い浮かべながら、部品に書き込む内容を作品から見つけだしたり、自分で考えたり感じたりする。この過程が論理力をつけるための学習活動になる。～略～マップの各部品を一つずつ集中的に取り上げる作業と、部品全体を有機的に関係づける作業の二つを授業の進み方に応じて使い分けられるようにしてある。また、部品の項目名は授業の目的や内容に応じて変更することができる。ただし、基本的には次の6つの項目から成り立つ。 藤森裕治先生著『バタフライ・マップ法』東洋出版より



【図5】新バタフライ・マップの基本配置



- (2) 共通の新聞資料『朝日新聞教育特集・知る原爆』を根拠とする。同じ基盤での対話をし、考えを深める。
- (3) 「是」か「非」か自分の立場を明らかにし、考えを深めていく。二者択一ではなく、是でも非でもない空間に存在する立場の人を保障する。

4 子どもの具体の姿

①「是」：(原爆ドームを保存した方がよい) の主な意見

「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでもおそるべき原爆のことを後世にうったえかけてくれるだろうー。」の「ー」(スラッシュ)の中味から。

- ・うったえかけて欲しい。
- ・だから原爆ドームを保存して欲しい。
- ・それを見ながら、原爆の恐ろしさを分かって欲しい。
- ・たくさんの人がそう思っている。

②「非」：(原爆ドームを保存しない方がよい) の主な意見

「原爆ドームを見ていると、原爆がもたらしたむごたらしいありさまを思い出すので、一刻も早く取りこわして欲しい。という意見(Ⓜ)あった。(Ⓜ)の中味から。

- ・あると思い出してしまう。(死んだ家族のことやあの日のこと)
- ・悲しくなる。 ・具合が悪くなる。
- ・死んでいった人の無残な姿を思い出すので、本当は話したくない。

③教科書の本文から以上のような読み取りができたところで、共通の土台となる根拠となる資料である『教育新聞知る原爆』(朝日新聞発行)を各人に配布した。この新聞は児童生徒向けに広島・長崎の原爆の様子を伝えており、当時の様子の写真や数々の体験者の声が掲載されている。ここから、自分の考えの根拠となる事実を探し出し、「事実の羽」と「説明の羽」を付箋に書き込んだ。



④シミュレーションでは、「是」「非」「第三者」の立場に分かれて、意見を聞き合った。

- ・実際に原爆ドームは保存され、世界遺産になっていたり教科書にもその意義を伝える文章が掲載されていたりすることから、当初子どもたちは、全員が「是」の立場でBマップを作成していった。しかし、作成していく中で、事実として挙げている物が、実は「非」(保存しない)である子も多くいた。

そこで、教師は、前時までの子どもの様子や日頃の学級の様子を考慮した上で、誰がどのグループに所属するかは教師の方で指名してシミュレーションをした。

相手を説得して、自分たちの考えに引き寄せるディベート的な学習ではなく、当時の人の気持ちを考えるためのシミュレーションを意識した。

授業の中で出された子供たちの考えは次の通りである。

「非」：保存しない の考え	「是」：保存する の考え
<ul style="list-style-type: none"> • 事実：熱風が吹いた。 ガラスの破片が体にくいこんだ 人たちを見た被爆者がいた。 黒こげになって水を求めて死んで いった人たちがいた。 • 説明：こわさを知っているから思い出したくない。 思い出すと悲しくなる。 かわいそう。 気持ち悪くなる。 悲劇を思い出したくない。 	<ul style="list-style-type: none"> • 「非」 に対しての反論 熱かったということをおもんに伝えたい。戦争を知らない人たちへ、後の時代に原爆のこわさを伝えたい。という思いの方が強くなった。 • 事実：瀬越さんの記事 『本当は思い出したくないんだよ』 中沢啓治さん(『はだしのゲン』の作者) 記事『後の時代に原爆のこわさ伝えたい』 • 説明：瀬越さんが閉じ込めていると次の人たちがわからない。 原爆ドームを保存することでこわさを伝えたい。
「第3者」の考え	
<ul style="list-style-type: none"> • 話を聞いていて、もう「是」という保存論が決まっている状態だったけれど、「非」の話の方が、納得できる部分が多かった。「非」は、原爆の被害を受けて立ち直れなかった人、「是」は、原爆の被害を受けて立ち直れた人のように感じた。だから「是」の人たちが無理やりこじつけたように思えた。(E男) • 話し合いで納得できたのは、「是」だと思った。なぜなら、M子さんの意見で、「今は、戦争のない世の中だから原爆のこわさを他の人たちに伝えて、もう戦争のない世代になっていくとよいと思う。」というのが納得できた。(K男) 	

〈話し合い後、作成した意見文〉

<p style="text-align: right;">「戦争と原爆ドーム」</p> <p>私は、「非」つまり、保存しないという立場で考えた。根拠として次のような事実が挙げられる。</p> <p>たとえば、「大粒の黒い雨」「川に浮かぶ遺体」という記事だ。内容は、川に遺体がプカプカ木材のように浮いていたというものだ。私は、原爆で人が次々に死んでいくことが、とてもこわいと思った。だから、被爆者たちは、「非」だと思ったと考えた。理由は、被爆者たちは、そんな嫌な過去を思いだしたくないだろうと思うからだ。</p> <p>しかし、逆の立場で考えるとどうであろう。つまり、「是」の立場。</p> <p>戦争でいろんな人たちが死んでしまった。だから、もう絶対に戦争はしてはいけないということを出し、伝えることが必要だ。保存すべきだという考えに納得がいく。</p> <p>私たちは、当時の十五年間もかかった議論をシミュレーションしてみた。「非」につなげて話をすることは、むずかしかつたけれど、「非」の立場になつてわかつたことは、どれだけ悲しいかとか悲劇を伝えることが大切だということだ。</p> <p>このようなことから、私は、原爆ドームを保存することについて、やはり、保存してよかつたと思つた。理由は、これを知つた人たちがもう、二度と戦争をしてはいけないと分かるからだ。</p>
--

5 授業の成果

(1) Bマップ法を利用したこと

- ・事実や説明を付箋に書くことで、自分の思考の過程がわかった。
- ・友だちのBマップを見ることで、友だちと自分の考えの相違点に気づいた。
- ・それまでのBマップの記述を見ながら、意見文にまとめることができた。

(2) 共通の新聞を根拠としたこと

- ・新聞の中にいろいろな角度から記事を取り上げ、端的にまとめてくれてあるので、事実をつかみやすい。
- ・共通の素材が根拠となっているので、友だちが何を根拠にどう考えたのかつかみやすい。(同じ記事でも説明によって、逆の立場となっていることもあった)

(3) シミュレーションをしたこと

- ・国語では初めてであったが、社会科では何回もやっており、その良さを感じている子どもたちであったので、単なるディベートにならずに当時の人たちの気持ちを感じることができた。
- ・初感をもとに、「はだしのゲン」のDVDを見たり、本を読んだり、原爆の本や写真集を見たり、いろいろな新聞社の70周年を取り上げた記事を読んだりしながら環境づくりをしたことで、考えがより深まった。

<実践授業その2> 実践者：黒岩理恵子（7～9年教科担任）

単元名：「シカの『落ち穂拾い』」 7年（中1）

1 本単元で新聞を活用した理由

この単元に初めて出合ったとき、「これは理科の一研究の作り方のお手本ではないのだろうか？」と思った。

「シカの『落ち穂拾い』」は、牡鹿半島に生息するサルとシカの観察し、色々なデータを取り、仮説を立てて実証、考察するという内容で、図表がふんだんに使われている文章である。

どの文がどの図表の内容を表現しているのかを確認しながら読むといった授業を行ってきたのだが、いつも何かすっきりしない授業になってしまうのだが、全国学力調査や高校入試には頻繁に図表を使った文章の読み取り問題が出題されている。しかも、一つの図表だけでなく、いくつかの資料を交えて考察するという問題なので、教科書の教材をひとつだけ扱っていても、そのような問題に太刀打ちできないと感じていた。

そこで、次のような授業を行った。

信濃毎日新聞
「御嶽噴火災害から一年」

火山 注意喚起望む声

観測・防災「進んだ」39%
「何とも言えない」最多48%

亡き人を思う 王滝で被災者家族ら一周年の集い

被害抑える方策 築く必要

<学習指導案>

1 目的

- (1) 生徒にとって魅力的な単元にするために、新聞からのタイムリーな情報と教材を絡める。
- (2) 近年、全国学力調査や高校入試に頻繁に図表からの読み取り問題が出題されている。教科書だけでなく身近な新聞記事の図表を活用することで、図表を読む力を高める。
- (3) 「御嶽噴火災害から一年」の記事から、アンケート結果だけでなく被災者遺族の思いなどにも気付く。

2 授業展開

- (1) 単元名 つながりを読む 「シカの『落ち穂拾い』」
- (2) 単元の核心
図表の役割や効果を理解し、事実とそれにもとづく考えを読み分ける。
- (3) 本時のねらい
教科書の本文を学習し、図表の効果や役割を考えた生徒たちが、新聞記事を読むことで図表の効果や役割、表現についてさらに考える。
- (4) 本時の展開 (全4時間中 第4時)
【ウォーミングアップ】(3分)
・天声人語の書き取り・漢字、語句の確認
【導入】(2分)
学習問題：新聞記事の図表と文の役割や効果を考えよう。
① 「シカの『落ち穂拾い』」で学習した図表の効果、本時の学習問題を確認する。
【展開】(25分)
学習課題：「御嶽山噴火から1年」の記事を読もう。
② 9月27日「御嶽山噴火から一年 火山 注意喚起望む声」の記事を音読し、漢字の読み方や意味を確認する。
③ 誰に対して行ったアンケートなのかを確認する。
④ 見出しや記事の中に使われているデータは、どの面の図表を根拠としているか読み取る。
⑤ アンケート結果からの考察を読み取る。
⑥ 考察まで読み取れたグループは関連記事「生還者 消えぬ自責の念」を読み、1面とのつながりを考える。
【終末】(15分)

2 成果と課題

○成果

- ・生徒の話し合いの中から、「文章の最後に何面のグラフを参考にしているのかを書いた方が読みやすい」「データをグラフにしたり色を付けたりすると分かりやすい」「アンケート結果だけでは分からない細かいことも文章で書かれているので、両方見ると分かりやすい」「1面でさらっと書いてあることを、別の面でグラフや表にまとめてあり、新聞全体で流れができてい」などの意見がでた。教科書教材の発展として新聞記事をつかったことで、図表と文章のそれぞれの効果をさらに考えることができたといえる。また、一つの記事をいろいろな角度から見る必要があると気付くこともできた。

○課題

- ・授業内で「図表の効果」と考えることは出来たが、文章表現について考えることができなかった。また被災者遺族の思いを全員が読み取ることが出来なかった。授業計画が甘かった。

○新たな研修課題

- ・「学びあい（グループ学習）」が出来ない生徒への支援
- ・複数のデータや資料を複合的に考え、表現する力はどのようにつけたらいいか。
- ・文章化されていないデータの読み取りと言語化

(IV) 研究のまとめ

- ・「協働の学び」では、主観だけで意見を述べてしまい、子供たちの考えが深まらない場面もあるが、事実に基づいて書かれている新聞記事を共通の根拠とすることで、客観的に物事を考え、思考力を深めることができる。つまり「協働の学び」に新聞活用を取り入れたことで、さらに思考力が高まったといえ、本校のステップ期の重点である「ものごとの根拠を探る学び」とも合致しているといえる。
- ・「原爆」の記事も「御嶽山噴火」の記事も、作られた話ではなく実際に経験した人々の生の声がかかれているので、その人々の立場になることができ、真剣に話し合うことができた。
- ・「原爆」「御嶽山」を特集した新聞は多面的に書かれているので、いろいろな角度から物事を見ることができ、友達の読みとりを知ることで、更に自分自身の読み取りも深まる。「協働の学び」においては、単独の記事よりも効果的な学習ができると考えられる。

(V) 残された課題

- ・このレポートではN I E実践を中心に報告しているが、実際にはI C Tを取り入れた授業が注目されており、校内外での研修もI C Tに関わるものが多い。N I Eでなくてはならない意味を問い直したい。